

日本ロータリー学友会第9回全国総会報告

日本ロータリー学友会代表幹事 高木直之

日本ロータリー学友会の第9回全国総会が、10月26、27の両日に渡り、札幌センチュリーホテルにて開催されました。国際ロータリー学友部のビル・リンツ氏をゲストスピーカーに迎えた同総会には、全国21地区より総勢84名が登録（ロータリアン30名、学友ロータリアン15名、学友36名、他3名）、ホスト地区の第2510地区からは、福田武雄ガバナー、福井敬悟ガバナーエレクト、羽部大仁RRFCをはじめ総勢19名のロータリアンと（内2名は学友ロータリアン）、16名の学友が参加、ホスト地区からの参加者数としては過去最高の登録となりました。

総会では昨年度の活動報告に続いて会計報告・監査報告が行われ、承認されました。次年度の開催地は千葉に決定、11月の7日・8日にオークラ千葉ホテルにて開催されます。初日の懇親会では、アイヌ音楽の演奏もあり、二日目の朝には参加者有志がEND POILO NOWの帽子をかぶって会場近辺の街角清掃を実施、ロータリーの広報にも努めました。



第2510地区の学友による講演は、1990年GSE団員、森田茂氏による「スマート農業による北海道酪農の未来」と2014-15年の職業研修チームの富岡恵氏、プーワナット・スパークブン氏両名による、タイでのVTTプロジェクトチームの活動についての発表でした。森田氏のチームの団長は、30年の月日を経て、残念ながら鬼籍に入られていましたが、5名全員が今回の総会に出席、GSEの絆の強さが感じられました。



ビル・リンツ氏からは、(1) 地区に学友委員会（この学友はすべてのプログラムのOBという新しい定義による）を置く必要はなくなったものの、会員増強・プログラムの横のつながりを増す観点から同委員会は重要である (2) 様々なプログラム単独の学友会（たとえば財国学友会、ローテックスなど）を持つ地区においては、単独の学友会を維持してもかまわない (3) RIによる学友会への金銭的な支援は、学友会が奉仕活動を行う場合に限ることになった、という内容の発表がありました。

これを受けて、参加者は各地区の委員会構成や、地区の学友関連委員会の現状について情報を交換しました。複数の学友会を一つに統合することで、それまで盛んだった単独の学友会（たとえば財国学友会）の活動が途絶えてしまう例もあり、活発な学友会活動の維持のために最善の道を模索しました。学友会の奉仕活動への支援に関しては、第2770地区の音楽学友によるポリオ撲滅のためのチャリティーコンサートと、同学友会会長、服部純一氏の職業を生かした地区補助金プロジェクトに関する発表に続いて、学友会としてできる奉仕活動について、皆で具体例を出しあいました。

単独でプロジェクトを企画することは困難かもしれませんが、地区内のクラブの奉仕活動にかかわって、その一部を学友会が担当、もしくはそれに加えて学友会が何かを行ってはどうというアイデアが出され、第2830地区(青森)では、米山梅吉翁が私財を投じて始めたハンセン氏病患者の療養所で、青森ロータリークラブが毎年植林活動を行っており、これと同時に、療養所を出られない方々のために学友がコンサートを開催してはどうか、という話になりました。このプロジェクトは近い将来実現するかもしれません。また今般うち続いた水害の支援に関しては、それぞれの地域のロータリアン・学友が現地のニーズを発信し、学友のつながりを生かして協力する可能性も話題に上りました。

